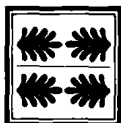


針の誘い

土屋隆夫

講談社文庫



講談社文庫

## 針の誘い

土屋隆夫

昭和51年1月15日第1刷発行

昭和51年3月10日第2刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製版 豊国オフセット株式会社

印刷 豊国オフセット株式会社

製本 有限会社千曲堂

© Takao Tsuchiya 1976

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

# 針の誘い

土屋隆夫

講談社



目次

第一章	前景	七
第二章	近景	二七
第三章	遠景	三三
第四章	背景	二九
第五章	全景	三三
解説		二六

権田萬治  
二六

三三  
二九  
三三  
二七  
七



針の誘い





# 第一章 前 景

「この事件には、そうなってしまった、というようなことは一つもないね。すべてが、精密な理論にもとづいて成り立っているんだ」

——ヴァン・ダイン、グリーン家殺人事件。

見知らぬ街の、せまい通りを歩いて行く。曲り角があったら、しめたものだ。そのてまえて、ほんのしばらく足をとめてみるがいい。細い小路が、右に伸びている。曲り角の向うは、見とおすことができない。それは、未知の世界なのだ。小さなアバンチュールが、あるいは、とほうもないドラマが、きみを待っているかもしれない。

決心がついたら、思いきって、その角を曲がってみるのだ。勇気がなかったら、きみのかわりに、一人の男を登場させよう。

その男は、見知らぬ小路の入口に立っていた。そして、なんのためらいもなくヒョイト、その角を右に曲がったのだ。

次の瞬間、男は、奇妙なドラマの登場人物になっていた。登場人物は、男のほかに、もう一人いた。それは、路上に横たわっている、若い女の死体であった。

細い小路の曲り角。それは舞台の袖であった。男は、なんのきっかけもなしに、いきなり舞台にとび出してしまったのだ。

もし、その男が、きみであつたらどうするか……。

東京地検の検事、千草泰輔は、そこまで走り読みした書物を、抜きとつた棚に戻した。赤い背表紙に、白抜きの活字で「検事の墓碑銘」と記してある。題名に惹かれて、手にとつてみたのだが、どうやら推理小説のようだった。

この種の読物は、検事の興味をそそらない。役所に出勤すれば、架空の物語よりもっと陰惨で血みどろな現実が、自分を待ちかまえているのだ。金を払ってまで、殺人や死体に対面する必要はなかった。

小さな書店だが、どの棚にも、おびただしい数の新刊本が並んでいる。せまい店内を一巡すると、検事はフラリと表へ出た。

たそがれてきた街は、無数の灯に彩られて、明滅するネオンが、原色の光を舗道に投げている。暮れおちる前の、透明な蒼さを残した空が、高いビルの向うにひろがっている。検事は、自分の靴音を楽しむように、人通りの少ない舗道を、ゆっくり歩き出した。

日曜日のせいかな、車の往来も、あまりはげしくないようだ。都心の雑踏にくらべると、街の中心に落着きがあった。小さな商店が軒を並べている。道は、ゆるい下り坂になって、左右にちりばめた灯の連なりが美しかった。

(もうすこし歩いてみるか)

どこと違って、あてはない。渋谷の大山町に、検事の部下である山岸事務官の家を訪ねた帰り道だった。先月の末、四谷のアパートから、そこへ移転して来た事務官が、

「ようやく、一国一城の主になったような気がします。チツポケな家ですが、風呂場に惚れました。湯船が檜なんです。それに新しい。湯につかると、木の香がブーンと匂ってくる……」  
「ほう」

「日曜日にも、おいで頂けませんか」

と、その時、事務官は誘った。「朝風呂に入って、いっぱいやりましょう」

「とんだ小原庄助さんだ」

「しかし、つぶすほどの身上いんしょうはありません」

「それで安心した。よし、新居拜見に出かけるか」

「お待ちしています。きつとですよ」

事務官は、子供のように念を押した。  
その約束を果たすために、検事は、今日の午後、大山町に彼の家を訪ねたのだ。

すでに、酒の支度ができていた。お互いに相手の好みは知りつくしている。検事は、ゆっくりと盃をふくむ。口にひろがる香りを、しずかに味わうほうだ。事務官は、水割りのウイスキーをグイとかたむける。それから、皓あはい歯で、氷片をカリツと噛みくだく。違った飲み方をしているけれど、いつでも、酔いの発散する頃合は同じだった。

「酔ったよ」

検事が、ほてった頬を撫でて、そう言ったとき、事務官のほうも、

「久しぶりに酔いましたねえ」

と、大きく息を吐き出した。

「もう、おいとましよう」

「まだ早い。それに風呂もわいています。ご一緒にいかがですか」

「それは遠慮する」と検事は言った。「二人とも、酒の入っている体だ。素っ裸のまま、心臓マヒ、なんてことになりかねない」

「大山町心中、ですな」

「まったく」と、検事は笑いながら立ち上がった。時刻は、五時を過ぎていた。

「車の拾えるところまでお送りしましょう」と言うのを、検事はことわった。

「いいよ。すこし歩いてみたいんだ。この辺は、ぼくも初めてだしね」

「へんな店へ入りこまないで下さいよ」

「あるのか」

「という話です」

「それも一興だ」

「おともしましよ、うか」

「奥さんが、うしろで目をつり上げている」

「もともと、こういう顔なんです」

「それで、きみが目じりを下げているわけか。つり合いのとれた、似合いのご夫婦だ」

事務官夫妻の、明るい笑聲に送られて、千草検事は、その家を出て来たのだった。

ゆっくりと歩いて行く。久しぶりに楽しい半日だった。酔いに染まった頬を、微風が撫でて行く。四月初旬の、くすぐるような風だ。このまま帰るのは、おいしい気がする。といって、「へん

な店」をさがすほどの気持はない。それでいて、明るい灯が、またたくネオンが、検事の心をか  
りたてる。——電気広告。光の毛虫がはいまわる……そんな詩があった。あれは草野心平だつた  
か。いや、堀口大学かもしれない。

それにしても、こんな他愛もないことを考えながら、中年をすぎた一人の男が、夜の街を歩い  
ている。それを、だれも知ってはいない。行き交う顔は、すべて他人だ。自分もまた、その他人  
の中の一人なのだ。歩みをさまたげるものはない。行先を問うひともない。孤独な彷徨。自分  
は、この見知らぬ街のエトランゼなのだ。

——見知らぬ街の、せまい通りを歩いて行く。曲り角があつたら、しめたものだ。

ふと、先刻たちよつた本屋で手にした推理小説の、書き出しの部分が頭に浮かんだ。

(曲り角か……)

検事は、視線を転じた。あつらえたように、細い小路が左に伸びている。

——曲り角の向うは、見とおすことができない。それは、未知の世界なのだ。小さなアバン  
チュールが、あるいは、とほうもないドラマが、きみを待っているかもしれない。

なるほど、と思う。いかにも推理作家らしい発想だ。いまさらアバンチュールでもないが、と  
酔つた検事の足は、その角を左へまがって行つた。

小路は、車一台が、ようやく通れるほどの広さだった。表通りとは違って、まばらな街灯の光  
が、点々とつづいている。両側の家は、ほとんどが個人の邸宅らしく、大谷石を積んだ塀や、い  
け垣にかこまれて、住宅街らしく、ひっそりと静まりかえっていた。窓から流れくる光が、植込  
みや、庭木の茂みを黒く映し出している。

小路は、途中から別の道と合していたり、私道ではないかと思われような路地が両側にあつたりして、かなり複雑だった。

検事は、いくつもの角を曲がっていったが、「未知の世界」はどこにもなかった。ほとんどが個人住宅で、わずかに、会社のクラブラしい建物や、アパートなどを見かけたくらいであった。ドラマもなければ、アバンチュールもない。平穩な市民の家庭が、道の両側をうずめていた。（さて、帰るとするか）

立ち止まって、煙草に火をつけた。小路は、そこで、やや広い通りとT字形に合している。右手の角には、鉄柵の塀越しに、小さな洋風の建物が見えた。門柱には、P国公使館の表示があつた。

（ほう、これがP国の……）

検事は、あらためて、その建物に目をやった。南米大陸の太平洋岸にあつて、国土の大半が森林におおわれているという小さな国から、日本の首都に移り住んで、この住宅街の片隅に暮している人たち。小さな公使館の建物が、その国の貧しさを現わしているようにも見えた。それでいて、この一画だけが、日本の法律の支配を拒否している。それは、当然であり、奇異なことにも思われた。

さて、と検事は煙草をすてた。この辺では、タクシーをつかまえられそうもない。やっばり、先刻の本通りに戻ることにするか。

検事は、公使館の建物の角を右に曲がった。

次の瞬間、奇妙なドラマが、検事の前に展開した。いや、千草検事自身が、ドラマの登場人物



になっていたのである。

——細い小路の曲り角。それは舞台の袖であった。

——男は、なんのきっかけもなしに、いきなり舞台にとび出してしまったのだ。

しかし、とび出したのは、検事ではなかった。

それは、若い女だった。

検事が、小路の角を曲がった瞬間、すぐ前方の路地の中から、突然、一人の女が走り出して来た。

## 2

最初に、検事の目をとらえたのは、その女の異常な態度だった。

女は、路地からとび出すと同時に、検事の姿をみとめたいらしい。一瞬、そこに立ちすくんでしまった。

数歩の距離を、検事は、ゆっくりと歩いた。歩きながら、黒っぽいスカートに、白いセーターの女が、片方は蹴はたで、片方にはスリッパという、奇妙な恰好であることに気づいていた。

「どうかなさったんですか」

近寄って、検事は声をかけた。

女は、視点の定まらない瞳を、いっばいに見開いたまま、わずかに唇を動かした。が、声にはならなかった。ゆたかな胸のふくらみが、大きく波うっていた。

「どうなさったんです？」